

## 分割における諸様相

## ものこころことば

鈴木隆芳

## 序

去る二〇一六年四月一九日に京都大学白眉センターに招かれて講演をする機会を得た。<sup>(1)</sup>当日の発表題目「ものこころことば…切るの《哲学》」とは、物質、心的事象および言語のそれぞれが「切断」や「分割」といった事態に際して、どのような様相を呈するのか、という問題提起と、これらを「切る」というフィルターにかけてみることで、各々の性質を横断的に把握できないか、という認識上の試みを意味するものである。

今日に至るまで、このテーマについては継続して考えてきたが、ここまでの思索を形にしておきたいと思い、ここに論考として表すこととする。<sup>(2)</sup>

## 一 物・労働

『ベルクソンの哲学』の著者ジル・ドゥルーズは、ある事象が分割される際には、二様の性質を示すと言う。<sup>(3)</sup>ひとつめは数的多性 (multiplicité *numérique*)<sup>(4)</sup>であり、これは、分割の以前と以後で性質が変化せず、当の事象はもとの質を保ったまま分けることができるというものである。数が増減しても、それじたいは質の変化を蒙らないもの、すなわち、数えることのできるものが、このカテゴリーにあたる。リングゴ2個+リングゴ3個||リングゴ5個の和は、リングゴの同質性が維持される限りにおいて成立する。こうした数的表象は、分割を完全に許容するものではあるが、そこには、なんらかの水準での抽象が伴う。

こうした抽象化は、「個」を生じない「量」の域にもやがて及ぶ。数が量に転化する認識上の契機は、例えば、吉本隆

明がマルクスの価値の哲学について述べた一節に見ることが出来る。

マルクスは価値をめぐってなにをしたのか。価値というものの世界を底のほうにむかって拡張することで、スミスやリカードにはまるでみえなかつた労働の二面的な像<sup>イメージ</sup>が分離してくるまで追いつめたのだ。いいかえれば労働の意味が具象的な像を抽象化されて、(中略)境界を超えてゆくのをみとどけたことを意味していた。この越境は同時に一個のリンゴの果実が、具象的な形も中身もうしなべて、もししいて映像化してみれば、支出された人間の(わたしの)労力のエネルギーが寒天のような無定型のゲル状になって凝集している労力の支出物に転化されてしまうことを意味した。またこの越境によって価値(交換価値)は、ただ量的な関係そのものにかわってゆくことだった。<sup>(5)</sup>

数える「個」から測る「量」への転化は、交換価値という抽象を経由している。それは、リンゴの和が、リンゴ一般という抽象によって成り立つということと、抽象の水準を異にしている。リンゴが「寒天のような無定型のゲル状」になるように、均質に液化化した労働は、量 $\parallel$ 時間という表象として再浮上する。労働2時間+労働3時間 $\parallel$ 労働5時間という式は、ひとたび流動化したものが、測定可能な「量」として

表象可能になった結果のものである。こうした吉本の解釈が由来する源は、例えば、マルクスが労働の匿名性について述べた次の一節に見出すことができる。

労働一般というこの抽象は、単に各種の労働の具体的な総体を精神で考えた結果であるばかりではない。一定の労働に無関心であることは、個人がたやすくひとつの労働からほかの労働にうつっていき、しかも一定種類の労働が、個人にとって偶然であり、したがって無関心であるようなひとつの社会形態に照応するものである。<sup>(6)</sup>

労働一般という抽象は、今日においてもなお有効な概念ではあるが、これにはある一定の社会形態が対応していることに留意する必要がある。ここでマルクスが言う個人にとって偶然な労働とは、工場労働に見られるような労働時間と余暇の明白な差異のある労働のことであるが、そこではいかなる時間も労働性の有無(±)という二項対立のデジタルな価値を帯び、労働性(+)とされる有労働性時間は、当の労働の個性を捨象しつつ同質のものとして共約できるのである。一方で、ポスト・フォーダイズム以降の労働形態は、こうしたイデオロギーとは異なるものに依拠している。新たに主流となった労働の遍在性や柔軟性といったものが労働一般という抽象を許さないのだ。ネグリ&ハートの語彙で言うところの「アイディア、イメージ、知識、コミュニケーション、協

働、情動的関係<sup>(7)</sup>は、フォーディズムに見られるような上意下達のピラミッド様式ではなく、起点も終点もないような錯綜し多文化したリゾーム状のネットワークを必要としている<sup>(8)</sup>。こうした情動労働が労働一般という抽象に抵抗を示すという事実は、私たちの文脈で言うところの数的多性と、これから述べる質的多性 (multiplicite qualitative) のあいだの差異が実在することの証左であり、それは物的事象と心的事象の境界、すなわち両者が切断と接合に際して示す差異として実現するのである。

## 二 身体・精神

分割に際して質の変化が必ず付随する事象、こうした事象が呈する多性は質的多性である。リングゴ5個は、リングゴ一般という抽象があれば、リングゴの質的变化を伴わずに分けることができるが、それとは異なり、人体の解剖のように分割に際して必ず質的な変化を伴う分割がある。この質的な変化は、一様に等しく起こるわけではなく、認識上の解釈に左右される。事実、解剖学的知見による身体部位の把握は、日常的慣用的なものとは大きく異なり、おのずと分割の結果も異なってくる。ただ、分割は恣意的に行えるものではなく、そこには良い切り方もあれば悪い切り方もあり、切り分け方の妥当性は、現実の治療行為の成否によって左右される。「自然本来の分節に従って切り分ける能力をもち、下手な肉屋のようなやり方でこわしてしまおうと試みることなく<sup>(9)</sup>」というソク

ラテスの言葉は、巧みな分割というものが、積極的な解釈によるものではなく、むしろ、経験的かつ受動的な認識によるものであることを示している。もちろん、ある分割の仕方がどれほど合理的に見えても、その根拠となった認識は相対的なものであることには変わりはない。西洋医学とは大きく異なった身体の解釈を行う施術であっても、それが治療行為に益するならば、その解釈には妥当性があるのだ。

それでも身体の場合には、こうした認識における相対性の許容域が無制限に拡大することはない。投薬や栄養の摂取といったものは、生物種としての身体に直接作用し、概ね同様の効果をもたらすからである。

一方で、身体とは異なり空間的延長を持たない心的事象の場合、認識の裁量の域は大幅に増大する。心の病の治療に際して、そこに物質一般もしくは生物種一般の解釈を援用することについてフロイトは難色を示している。

みなさんには、みなさんの医者としての意図に役立たせうるような哲学的補助学問が欠けているのです。といって、思弁哲学も、学校で教えられているような記述心理学、あるいは感覚生理学につながるいわゆる実験心理学も、みなさんに、身体的なものとの心的なものとの関係について、役に立つことはなにひとつ教えてくれません。あれこれの心的な機能障害についても解決の鍵を与えてはくれないのです。医学の枠内では、精神医学が観察し

た精神障害を記述し、これを臨床的な病態像にまとめることはするのですが、精神医学者自身、もっぱら記述的に自分たちが積み上げたものを学問だと言っているのかどうか迷うような時もあるのです。これらの病態像を構成している症状も、その発生の理由やメカニズムや相互の結びつきについては未知のままです。症状に対応して、心の解剖学的器官である脳の変化が証明できるわけでもなく、また、そのような変化から逆に症状を説明することもできずにいるのです。(中略) 精神分析が埋めようとしている間隙は、実はここにあるのです。<sup>10)</sup>

病態を「解剖学的器官」に特定することが身体を扱う際には優先されるのに対して、心的なものを扱う場合、こうした局在化はあまり功を奏さない。言語中枢などのように脳内の部位に特定の機能を割り当てることで、心的事象の在処を捉えようとする試みはあるが、実際のところ、フロイトの頃から今日に至まで脳の特定部位と心的事象の対応は漠然としたままである。しかも、取り上げられる心的事象といえは、単純な喜怒哀楽といった記号的なものにとどまるありさまだ。

フロイトの精神医学に対するこうした不信は、ベルクソンでは言語に向けられる。「共感、嫌悪、憎悪」というものが、そのまま数をかえずに心を左右する、と説く心理学は、言語にあざむかれた粗雑な心理学である。<sup>11)</sup> 心的事象を第一に扱うはずの心理学が、言語記号によって縁取られた概念を経由

して心的事象を扱うということは、当該言語の特定の語彙の意義によって、心的事象の扱い方が左右されることを意味する。言語による文節と心的實在の分割が一致するかどうかは実は大きな問題であるはずなのに、そこに疑いをもたず、言葉によって心的なものを分割してしまうこと、ベルクソンの心理学に対する批判はそこに向けられている。

心的なものと言語の乖離についての実例として、ベルクソンは『意識に直接与えられたものについての試論』の中で次のように述べている。<sup>12)</sup> 人が一般に感情について抱くイメージは、ある感情が心のどこかにあつて、それが何かの原因で強くなったり、弱くなったりするというものであるが、しかし本当にそうであろうか。ベルクソンは「欲望」という感情を取り上げて問う。極度の欲望を抱いた人は、なぜ、欲望の対象とは異なる対象までが、それまでとはちがって知覚されるのか。なぜ、欲望だけではなく、他の感情や感覚までもが付随して変化するのか。なぜ、心のすべてが欲望に支配されたように感じるのか。かりに、従来の心理学の言うように、脳の一部にある欲望が強弱を被るだけならば、こうした変化は起こらないはずであろう、と。だが実際に起こっていることはそれとはちがっている。欲望の強度の変化は、現実には、質的变化として生じる。質的变化において、欲望は他の感情や感覚器官にまで浸透し、それらを巻き込みつつ増大するのだ。こうした他との相互浸透があることで、欲望という心的事象はもはや「欲望」とは呼べないはずなのだ、言語記号

よってかろうじて「強い欲望」として表象されているに過ぎないのである。

言語は、愛情や憎悪や、人の心を動かす無数の感情の、客観的で非個人的な面しか定着できなかった。われわれは小説家の才能を、共通の領域から感情なり観念なりを引き出す能力によって評価する。それらは言語のせいで見えないものとなっていた。彼はそれらの生々しい個性を無数におよぶ細部の描写を並べることで表そうと試みるのである。けれども、一つの運動体の二つの位置のあいだに無限に点を挿入しても決してそれが通過した空間を充たすに至らないのと同様に、われわれが話すというただそれだけのこと、つまり、われわれは観念をお互いに連合させ、そしてそれらの観念が相互浸透を行うかわりに並置されるといったそれだけのことのために、(われわれは) 心が感じていることを全面的に翻訳することには失敗する。かくて思考は言語を用いては通訳できないままである。<sup>13)</sup>

心的事象と言語のあいだにあるのは逐一の対応関係ではない。同様のことは、異なる言語のあいだでも生じている。英語 hot water と日本語「湯」の非対称性からもわかるように、私たちは言語による世界の分節化が相対的なものであることは十分に心得ている。だが、一旦、心的事象の話になると、

一方に未定形の情動があり、それを言語が「欲望」と「通訳」していることには気付きにくい。「水」の温度を上げると「湯」になるが、これは日本語に「湯」という語があるからであって、英語では water のまままである。だとすれば、「欲望」が強度を増してもなお「欲望」という語で表されるのは、たまたまそこに語彙がないからであると、なぜそう考えられないのか。

物質、労働、身体、心的事象と順を追って進めてきた本稿の考察は、それぞれを分割する際にはいかなる認識上の操作が必要であるかを問うてきた。これらのうちで、リングゴを例に挙げて述べた「物質」は、最も自明の個別性や単位性を呈し、それゆえ、認識上の操作をほとんど伴わずとも、分割して扱うことができるもののように見えた。だが、ここまで述べてきた認識の相対性という問題をつきつめて考えてゆけば、こうしたヒエラルキーも流動的であることが見えるくる。もしかししたら、これと同じ思索の進展をベルクソン自身も経験したのかもしれない。というのも、ベルクソンは後期の著作においては物質と心的なものを異なるものとして対比させるよりは、むしろ、物質と心的事象を架橋する哲学を模索しているように見受けられるからである。

科学がひとつの系を孤立させ閉じるときの操作は、まるで人為的というわけではない。もしそこに対象に根差した基盤がないならば、この操作がある場合には適切で

あり、ある場合には誤っているという判断もままならないであろう。(中略)物質とは、幾何学的に扱うことが可能で、孤立した系を構成する傾向を持つ。物質を定義しようとするなら、まさにこの傾向を参照するしかない。ただ、これはあくまでも傾向に過ぎない。物質は極限に至ることもなく、また、孤立化も完遂することはない。それでも科学がそうしているのは、研究の利便性のためである。そうした系が、孤立しているといっても、実は外からなんらかの影響を受けていることを科学は暗に認めているのである。<sup>14)</sup>

目の前にあるリングがいかに世界から孤立して存在しているように見えても、それは多様な水準で世界と浸透し合っている。物質代謝、食物摂取、商品であるのみならず、絵画や神話のアトリビュートとして、リングは複数の系にまたがっている。冒頭で数えたリングは、このうちのひとつの系に属するリングであったのだ。

### 三 言語

これまでの観察を通してわかることは、ある事象が分割される際には、必ず認識上の解釈を経るということであった。認識は物理的、社会的、心理学的な学識的なものから、日常の慣用に至るまでさまざまであるが、いずれにせよ、こうした分割の基準が相対的なものであることには変わりはない。

そして、ここで新たに検討するのは、言語と分割の問題である。本稿副題の「ものこころことば」を見て、日本語の話者はそれを三語に容易に切り分ける。この分割の根拠は、「もの」「こころ」「ことば」というそれぞれの語の意味であり、したがって、この分割はすでに単位として分割された語を前提としていることがわかる。このように言語の分割が意味を基礎にしていることは、一見、あたりまえのようであるが、ここにこそ言語事象の特殊性があることはそれほど見やすいことではない。

現行の日本語の規範では望ましくないとされる「ら抜き言葉」の「こんな服は着れないよ」が生じるにあたっての言語意識の働きを追ってみると次のようなことが起こっていることがわかる。

- (一) 五段活用動詞「切・る」↓「切・れる」
- (二) 「れる」に「可能」の意味
- (三) 同様の分割を上二段活用動詞「着・る」に施して「着・れる」

形態「着れる」が誤用とされつつも存続している理由は、これが意味にもとづく分割という言語意識の本性を反映しているからである。さらに「着れる」「着られる」の対立によって、前者を「可能」、後者を「尊敬」と弁別できることから機能性の面でも、この分割には理がある。こうした本来とは

異なる形態を産出する分割と結合を言語学では一般に異分析 *metathese* というが、実際のところ、分割の結果が文法なり規範なりに合致しているかどうか、ということとは無関係に発生するのが言語意識なのである。では、ここで分割と新形態の産出を行う言語意識は何を指しているのであろうか。

フランス語の単純未来の接辞について、現行の多くの文法書は *chanter-ai* と分割し、*chanter* を動詞語幹、「*-ai*」を「未来」を意味する活用語尾として紹介している。この分割の仕方にはとりたてて不便もなく、他の動詞にも「*-ai*」を付加することで *finir-ai* などの単純未来が得られる。しかし、この分割は、フランス語がラテン語に由来することにこだわるならば誤りになる。かつてこの単純未来は、動詞不定法 *chanter* に「持つ」という意味をもった *ai* を付加することで生じた。英語の *have to* にも見られるように、印欧語において「持つ」は「すべき」という義務を意味し、それが「これからすべきこと」という含意を経由して「未来」を意味するようになったからである。したがって、こうした史的経緯を踏まえる限り単純未来 *chanter-ai* は *chanter-ai* と分割するのが正しいことになる。

ここで問題なのは、いずれの分割が正しいのかという問題ではなく、*chanter-ai*, *chanter-ai* という二通りの言語意識が共通した傾向を持っているということである。前者の場合は、*chanter-ai* の分割を経て *finir-ai* を作る。後者の場合は *chanter-ai* から *finir-ai* を作っている。この観察からだけで

も、言語意識の働きが実は極めて単純なものであることがわかる。それは、意識中にあるものと同じく分割し、同じく接合するという類推作用である。実のところ、ここであげた例は、類推という現象に焦点を当てるための特殊なケースである。普段から不断に言語意識はこうした分割から接合にいたる「類推」を行っている。そしてそれが意識にとつてなんの障りも覚えないほど、類推は言語活動の実態の深層にまで至っているのである。

ある時点で任意の言語をひとつとれば、そのことごとくは類推形成の巨大なもつれ合いである。ある部分のごく最近のもので、ある部分は漠然としかわからないほど過去に遡る。したがって、言語学者をつかまえて類推形成の例を引けというのは、鉱物学者（地質学者）に鉱物の例を上げさせたり、天文学者に星をひとつ示せということと同じことである。<sup>15)</sup>

言語が、他の事象と分割に際して異なった様相を呈するのは、意味によってあらかじめ確定された単位によって言語は分割されるという冗長性にある。言語は「結合できるものを分割し、分割できるものを結合している」<sup>16)</sup>のである。それは、私たちが言葉を理解し、話すという営為の実態となんら変わりはない。言語の分割において働いている言語意識の作用の特徴とは、それが始めから再認であるということである。

## 結論

物、労働、身体、精神、言語のそれぞれは、分割という篩にかけることで、各々が異なった様相を呈した。空間内において延長を持つもののほど、一般には分割に際して認識上の困難が少なく、一方で、心的事象や言語の場合には、物質的基盤を欠くことが、これら事象を実証的に捉える際の障害になっているように見える。しかし、本稿で示したように、いかなる事象の実在性も、孤立した静態的な分析から生じるのではなく、その事象を含む系から生じていることを考えに入れれば、これら事象の多様性に架橋するような思索が行えるのではないかと思っている。

## 注

- (1) 京都大学白眉センター公開シンポジウム「研究の原点とは」、京都大学芝欄会館、二〇一六年四月一九日。
- (2) 本稿のテーマについては、鈴木隆芳「分割—からだところとげんこ」『日本医科大学基礎科学紀要』(第四〇号、二〇一一年、一一二—一〇七頁)に表したのが始めてである。
- (3) Gilles Deleuze, *Le Bergsonisme*, 1997 (1966), PUF, pp. 30-32. ジル・ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』宇波彰訳、一九七四年、法政大学出版局、三四—三六頁。
- (4) *multiplicite* は一般に「多教性」や「多様性」などと訳されることが多いが、予断を避けるため、ここではニュートナルな語義を持つ「多性」という訳語を用いた。なお、
- 多性が適用されるのは、複合性や集合性を呈する事象一般である。
- (5) 吉本隆明『ハイ・イメージ論Ⅱ』ちくま学術文庫、一九九四(一九九〇)年、三八頁。
- (6) カール・マルクス『経済学批判序説』(二八五九)『経済学批判』武田隆夫他訳、岩波書店、一九五六年、三一八頁。
- (7) アントニオ・ネグリ & リデル・ハート『マルチチュード』(上) 幾島幸子訳、日本放送出版協会、二〇〇五年、二四〇—二四二頁。
- (8) リゾーム *rhizome*、すでにさまざまな文脈で使われている語彙であるが、ここではドゥルーズ & ガタリ『千のプラトー』での定義を引いておく。「リゾームは任意の一点を他の任意の一点に連結する。(五一頁)」「リゾームには始まりも終点もない、いつも中間、ものあいだ、存在のあいだ、間奏曲 *intermezzo* なのだ。(六〇頁)」。ジル・ドゥルーズ & フェリックス・ガタリ『千のプラトー 資本主義と分裂病』宇野邦一他訳、河出書房、二〇一〇(一九八〇)年。
- (9) プラトン『バイドロス』265E—266A、藤沢令夫訳、岩波書店、一三三—一三五頁。
- (10) フロイト『精神分析入門(上)』高橋義孝・下坂幸三訳、一九七七年、新潮文庫、二〇—二二頁。引用に際しては仮名(か)に手を加えた。
- (11) Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1997 (1927), PUF, p. 124. アンリ・ベルクソン『時間と自由』平井啓之訳、白水社、一九九年、一五三頁。
- (12) *Ibid.*, p. 190. 同書、二一〇頁。
- (13) *Ibid.*, p. 152. 同書、二一九頁。



- (14) Henri Bergson, *L'Évolution créatrice*, 1938 (1941), p. 10.  
アンリ・ベルクソン『創造的進化』真方敬道訳、岩波書店、  
一九七九年、三一―三三頁。
- (15) Ferdinand de Saussure, *Écrits de linguistique générale*, 2002,  
PUF, p. 161. 前田英樹編・訳『沈黙するソシユール』  
書肆山田、一九八九年、七九頁。
- (16) 鈴木隆芳(二〇一一)、前掲、一四頁。